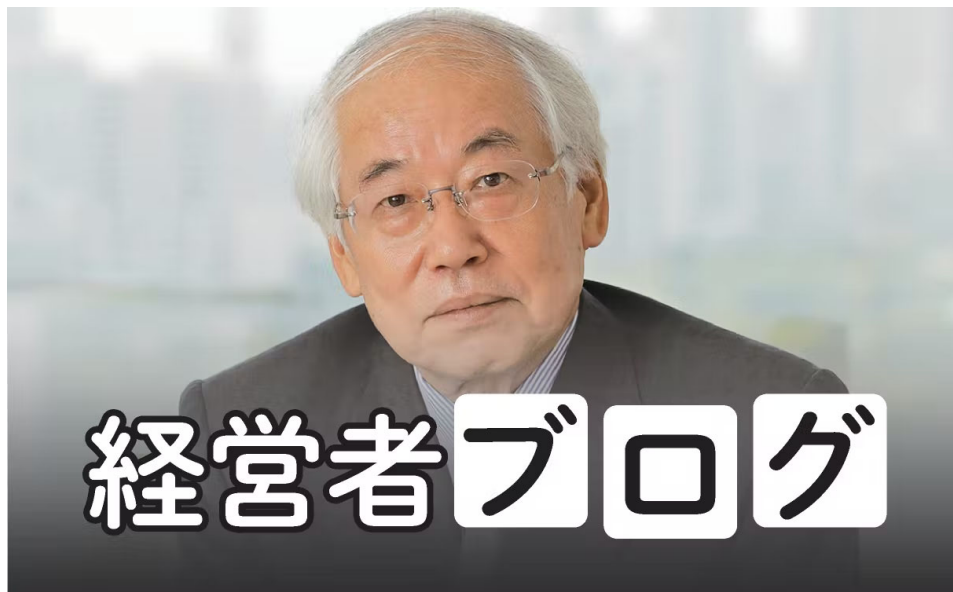


18年目の音楽祭閉幕、「どんな状況でも続ける」

経営者ブログ 鈴木幸一 IJF会長

2022/4/20 5:00 | 日本経済新聞 電子版



短期間での決着を意図していたとされるロシアのウクライナ侵攻は、ひと月を超えて泥沼の戦いとなっている。一時的な戦術なのか改めて侵攻を目指すのか予測がつかないのだが、ロシア軍はキーウ（キエフ）周辺から撤退する一方、東部地区への攻撃はますます激しくなっているようだ。病院から民間住宅まで、容赦ない無差別攻撃によって、ウクライナの民間人の死者の数はどれくらいになるのだろうか。海外のテレビ局の取材による破壊されつくした都市の映像は、目をそむけたくなる無残な状況である。

20世紀の暗部を再現

経済の拡大、科学技術の急速な発展による「豊かさ」を実現した20世紀は、一方で歴史上、例のないスケールの戦争があり、殺戮（さつりく）、虐殺を繰り返した野蠻で暗黒な世紀でもある。その20世紀の暗部の歴史を再現させるのが、ウクライナに対するロシアの侵攻である。その映像の前では、プーチンの国家戦略等に関する専門家の解説がしらけた講義のようにしか聞こえなくなる。

「兵士動員総数7000万、戦死者900万とも推計され、負傷者や不明者の数は戦死者の数倍に及ぶ。ヨーロッパの主要な参戦国は、当初の思惑をはるかに超えて長期化した消耗戦を戦い抜くために総力戦を余儀なくされる。戦場を経験した兵士はもちろん、銃後を守る人々にまでとてつもない犠牲を強いたこの戦争は、ヨーロッパ社会に近代の意識——解放への執着——が芽生えるのだ」（「春の祭典 モードリス・エクスタインズ著 金利光訳」）





19世紀末、当時のヨーロッパの文化に憧れ、舞踏家として活躍した。若い頃に知ったのだが、欧州の文化について齟（かじ）り続けながらいつの間にか老年になってしまった今でも、記憶の底から浮かぶことがある。

激しく複雑なリズムの交錯

先に引用した文章は、『春の祭典——第一次大戦とモダンエイジ』の訳者があとがきに記した文章の一節である。同書は、1913年にパリで上演され、スキャンダラスな騒ぎを引き起こした「春の祭典」の公演に始まり、第2次世界大戦に至る欧州を描いている。初めてこの書物を手にしたのは昔のことだった記憶があるのだが、手元にあるのは、2009年に刊行された新版である。

「幕が上がり、踊り手が登場し、高く跳ねてトーダンスのステップを踏むが、彼らは伝統を無視し、外足で踏むべきステップを内足で踏む、たちまち客席に怒号が飛び交い非難の声があがる」。歴史に残るダンサーであるニジンスキーがどのようなステップを切ったのか知る由もないのだが、ストラヴィンスキーが作曲した「春の祭典」は繰り返し演奏され続けている。百年も以前に作曲されたとは思えない激しく、複雑なリズムの交錯はいまだに新鮮なのだが、聴衆を怒らせるほどの刺激はなくなっている。

ネット時代の情報戦

ロシアとウクライナの戦いにおいて、圧倒的な戦力を持つはずのロシアがいまだにウクライナに対し制空権を握れず、ミサイル攻撃に頼っている。それはネット時代の情報戦によって、ウクライナが西側諸国からかつては想定もできなかった類いの情報提供を受けているからだとの指摘がある。



インターネットの成り立ちを考えても、米国の国防総省が膨大な資金を投入して技術的な基礎というか基盤を構築する。ある程度、具体的な事業、としての見通しが見えるようになると、民間から巨大な投資資金が流入する。そして通信と情報が一体となったインターネットが、金融と並び21世紀の最も重要なインフラとなったのがその歴史である。

ウクライナへの侵攻に対し、エネルギーをロシアに依存しているにもかかわらず、欧州諸国が結束し、西側諸国が経済制裁を実施している現在、米国を先頭に、情報戦において、徹底してウクライナを支援するのは当然の帰結である。

泥沼化していたアサド政権のシリアに対しロシアが優位に立てたのは、徹底した空爆によるものと専門家は指摘している。ウクライナで想定しなかったほどの苦戦を強いられているのは、いまだにロシアが制空権を奪えず、苛烈な空爆を行えないことにあるといわれている。ウクライナは戦闘機等の供与は受けていないものの、米国を中心とする西側諸国から高度な技術による情報提供を受けているとされる。

二重の障壁を乗り越えて

「どんな環境に遭遇してもできる限り続けること。それが将来に対する一番大切なことである」。「東京・春・音楽祭」は、現代を代表する指揮者リッカルド・ムーティさんの教えを忠実に守って、パンデミック下でも、できる限りのコンサートを開催してきたのである。拡大するパンデミックに対し、厳しい管理下にあった2年間、海外の演奏家によるコンサートで実現できたのはわずかな公演だけだった。



ハナソウ（筆者撮影）

「今年こそ」と思ったのだが、今度はウクライナにロシアが侵攻、オミクロン型の出現によるパンデミックと、二重の障壁を乗り越えなければならなくなった。ウクライナとロシアの戦争によって、ロシア上空のフライトが不可能となったことで、空路の変更、航空チケットの入手難、価格の高騰などが、大きな問題となった。特に、演奏会形式による2つのオペラの公演については、指揮者、歌手ともに海外の演奏家を中心となるわけで、厳しい状況だったのだが、針の穴を通すような努力によって、なんとか実現することができた。

最終日に演奏キャンセル

険しい隘路（あいろ）をなんとか通り抜けて実現できてゴールが見えたと思ったのだが、最後になって今年のラストコンサートとなるはずの演奏会が、主役となる大歌手から「陽性反応が出てしまい、日本に行けない」と連絡がある。確認の意味で2度ほど検査を受けてもらったのだが、陽性には変わりはないと連絡が来る。「ふーむ」である。

というわけで、最終日のコンサートはキャンセルという形で、今年の音楽祭は終わることになってしまった。難しいものである。なにに寄らず「好事魔多し」というか、ほっとした途端、思わぬ障害がおこるものなのである。あらゆる事業についても言えるのだが、「ここまで順調にいったから」といって次が同じようにいくなどと思うことが、失敗の始まりなのである。

【関連記事】

- ・ [ロシアの孤立、文化・芸術面でも](#)
- ・ [新型コロナ下の生活習慣、2年は元に戻らない](#)